

令和5年度 自己評価表

鳥取県立倉吉養護学校

| | | | |
|---------------------------|---------------------------------------|----------------------|---|
| <p>中長期目標 (学校ビジョン)</p> | <p>○未来に向かい、自分らしく輝き豊かに生きる子どもを育成する。</p> | <p>今年度の 重点目標</p> | <p>○自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成 ○質の高い職員集団の実現 ○安全で安心な学校の実現 ○「チームくらう」の推進</p> |
|---------------------------|---------------------------------------|----------------------|---|

| 年 度 | | 当 初 | | 評 価 結 果 (10月) | | | | |
|--------------------------|--|--|---|--|--|---|--|--|
| 評価項目 | 部 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 | 次年度への改善方策 | |
| 自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成 | A 部門 | <p>○子どもたちが日々の学習に期待感をもって取り組み、一人一人の方法で表現する力を育む授業づくり</p> | <p>○ルーティンになっている流れで見通しを持って生活することができている。 ○学習担当の教職員に対しては、自分の思いを個々の方法で伝えることができているが、いつまでも、どこでも、誰とでもコミュニケーションをとれるとは限らず、自身の表現力を高める必要がある。</p> | <p>○様々な学習活動を通して、児童生徒が一人一人の方法でいろいろな人に気持ちを伝えたり、表現したり、関わろうとしたりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答</p> | <p>○表現、表出についての、懇談等を通して保護者から情報収集を行ったり、支援者同士で情報共有を行ったりする。 ○表現力についての研修会を開催する。 ○児童生徒が主体的に取り組むことができるような単元、題材、教材等を支援者で検討し、授業作りを行う。 ○学習グループで使っている教材について情報共有する。</p> | <p>○表現、表出、についての情報共有や保護者からの情報収集については、どちらかというとできた62.5%、できた37.5%だった。よい傾向であるため、引き続き、関わる教員同士が情報共有、コミュニケーションをとりやすい状況を作っていく必要がある。 ○児童生徒の興味・関心、身体の状態を踏まえ、活動しやすい姿勢・環境設定等に努め、教材研究を行うことができたとする回答が「できた・どちらかというとできた」で100%だった。 ○学習グループで使っている教材について情報共有することについては、「どちらかというとできなかった」の回答が25%、支援者間での教材等についての情報共有についても「どちらかというとできなかった」が37.5%だった。教材についての情報共有の方法を工夫していく必要がある。 ○取り組みの中で、児童生徒の表現力、周囲の人たちと関わろうとする力については、できた・どちらかというとできたとの回答で100%だった。</p> | C | <p>○教材についての情報共有については、研究とタイアップしたり、学部会の中に教材紹介の時間を作ったりして教員同士の教材を見合える場の設定をしていく。 ○「できた」と感じている教員は2割～4割で、「どちらかというとできた」が4割～8割であるため、「どちらかというとできた」を「できた」と教員が自信を持って答えることができるよう、前回の取り組みを継続しつつ、支援者同士でコミュニケーションを取りやすい環境作りに取り組む。</p> |
| | B 小学部 | <p>○主体的に活動したり表現したりする姿へ繋げる指導・支援の工夫</p> | <p>○児童の達成感や、主体的に活動する意欲を育むため、教育活動全般を通して、様々なセサメントからの児童の実態把握を行い、発達段階に応じた表出や表現できる学びの場を作っていく必要がある。</p> | <p>○児童が学習や生活の中で、自分で伝えたいことや表現したいことを、自分なりの方法で表出したり表現したりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答 ※学習後の振り返り場面の姿を捉えて、児童の姿容を評価</p> | <p>○担任だけではなく、教員間でも児童の実態を共有し、学習内容や指導・支援方法を検討して、評価・改善を行っている。 ○児童の表出方や表現力を広げるために、有効な支援ツールや教材、教具の情報共有を図る。 ○児童の学習の様子や学習の広がりについて、保護者や関係機関と共有し、連携を取っていくことを継続する。</p> | <p>○担任と級外、また職研やグループの会で情報交換・共有をしながら、支援や指導、前向きな授業改善等を行っている。児童の実態により、学習参加を優先し、教科目標を意識できていないこともある。 ○教材の貸出や、言葉での指導・支援が難しい際には、iPad等のICT機器を活用し視覚的支援を行っている。授業準備では、指導者間で教材研究をしながら、よりよい支援が実施できるようにしている。活動の様子を動画撮影し、児童の興味関心、意欲が高まるように、出来映えやふり返りの材料と、教師へ活かしている。 ○連絡帳や学級通信等で日々の学習の様子や成長をリアルタイムで積極的に伝えるよう心がけている。また、学習や生活の状況についても共有している。支援会議や懇談でも、情報共有が図れている。療育園のドクターや鳥大の井上先生のコンサルで、個別配慮児童の対応の仕方を見直し、きっかけにもなり、できることから取り組んでいる。デイサービスとの連携については、保護者を通すこともあり、連携のしづらさを感じることもある。</p> | B | <p>○児童それぞれの主体性を育むための教材教具、単元設定や学習内容の工夫をさらに進める。指導者間での工夫と学習や単元を振り返り、効果的な支援や学習内容の共有、また次単元や次年度に向けて改善できる点を話し合い、授業作りをしていく。また、児童の状況に応じて、積極的にケース会議を開くなど、個に視点を当てたアプローチの仕方についても検討していく。 ○振り返り要求場面等、児童の良さや得意なことを伝えたり、披露したりできる場面を意図的に組んでいき、さらに表現力や自己肯定感を高める学習場面を設定していく。 ○ICT機器の有効活用は継続するが、ICT機器では補えない、実物の良さや板書等、活動・学習内容の工夫に努めていく。 ○関係機関から得た情報は、しっかりと関係指導者で共有を図り、よりよい支援・指導を実践していく。デイサービスとの連携だが、主体は保護者であるため、その連携の仕方については学部だけの課題ではないので、主事会等で話題に出し、学校としての連携の仕方について考えていく。</p> |
| | B 中学部 | <p>○表現力の育成を目指した授業の充実</p> | <p>○昨年度の取り組みから、自分なりの方法で気持ちや思いを伝えようとする姿が増えつつある。しかし、伝え方や言葉遣い等に課題が現れられ、トラブルにつながる場合がある。また新年度になり、人間関係や学習環境が変化したことにより、自分から気持ちや伝えたい姿も見られる。</p> | <p>○相手を意識した伝え方を身につけ、自分の気持ちや思いを伝えることができる。 ※教職員アンケートで8割以上「できた」と回答 ※生徒アンケートや学習の記録から評価</p> | <p>○相手に伝わったという経験を積み重ねられるよう、生徒と指導者や生徒同士がやり取りをする機会を意図的に設定する。 ○自分や相手の良さに気づき、認め合える環境づくりを行う。 ○学習グループや学部内で、生徒の様子や学習の工夫、指導支援等について情報共有を行う。</p> | <p>○アンケート集計より そう思う23.1%、だいたいそう思う53.8%→76.9% あまり思わない23.1%、思わない0%→23.1% ○生徒と指導者との関係づくりに努めたことで、生徒から指導者に対し、素直に思いを話すことができるようになってきた。指導者を取り持つことで、生徒同士が相手を意識して伝えられるようになり相手の状況を考えて気持ちや伝えたいことをつづつある。生徒からの発信を指導者が待つことで自分から伝えようとする姿も増えつつある。 ○日々の学習の中に、あいさつや敬語の使い方の大さを学ぶ機会を設けたり、学級やグループでの学習で「伝え方」のめあてを挙げ、学習の最後に必ず振り返りを行ったりしたこと、伝える力を身につけつつある。 ○生徒の実態によっては、繰り返しの場面など限られた相手や場面であればできるという状況がある。</p> | C | <p>○現段階の生徒の実態把握や評価を行い、学習グループや学部内で情報共有をする。実態に合わせた学習機会の設定や支援等を行う。 ○引き続き、土台となる生徒と指導者との関係づくりに努め、指導者を介した関わりや生徒同士の相互評価などの場面を意図的に設定し、生徒同士の関係づくりも促進されるようにする。</p> |
| B 高等部 | <p>○一人一台端末(ICT機器)を利用した学びを通して、周りの人とのやりとりができる生徒の育成</p> | <p>昨年度、学部研究で、指導者と生徒、生徒同士のやりとりのある授業づくりに取り組んだ結果、生徒が意思を伝える機会、やりとりする機会が増えた。しかし、単一、重複とも生徒同士でのやりとりに関しては、まだまだ改善する必要があるという課題が残った。今年度はそれに加え、高等部一人一台端末の導入に伴う、ICT機器を利用した新しい学びを推進する必要がある。そこで、今年度は、授業や生活の中でICT機器を利用しながら、指導者や生徒同士でのやりとりを増やす取り組みを通して、自己肯定感を高めるようにしたいと考えている。</p> | <p>① 生徒が、授業や生活の中でICT機器を利用した学びをすることができる。 ② 生徒が授業や生活の中でICT機器を利用しながら、指導者ともしくは生徒同士でのやりとりをする必要があるという課題が残った。 ※以上、指導者に中間・期末アンケートを行い、2つとも80%以上でA評価、1つ以上が80%以上か授業づくり研究を進めていく。 ○昨年度の学部研究での、やりとりのある授業づくりを基盤としながら、ICT機器を活用しながら、やりとりを増やしていくか授業づくり研究を進めていく。 ○昨年度の学部研究での、やりとりのある授業づくりを基盤としながら、ICT機器を活用しながら、やりとりを増やしていくか授業づくり研究を進めていく。 ③ アンケート回答が可能な生徒には、ICT機器を利用して、学ぶことが楽しくなったかどうか聞いてみたいと思っています。</p> | <p>○まずは、指導者がICT機器を利用した学びについて理解する必要があるため、学部で研修会を行う。 ○授業や生活の中でICT機器を利用した学びの実践例を共有しながら、取り組みを進める。 ○昨年度の学部研究での、やりとりのある授業づくりを基盤としながら、ICT機器を活用しながら、やりとりを増やしていくか授業づくり研究を進めていく。 ○昨年度の学部研究での、やりとりのある授業づくりを基盤としながら、ICT機器を活用しながら、やりとりを増やしていくか授業づくり研究を進めていく。 ③ アンケート回答が可能な生徒には、ICT機器を利用して、学ぶことが楽しくなったかどうか聞いてみたいと思っています。</p> | <p>開始時5月末と中間10月に、アンケートを実施。 ①ICT機器を利用した学びについては、5月末(70.6%)から10月(95.8%)まで活用が広がった。②ICT機器を利用したやりとりのある授業づくりでは、5月末(17.6%)から10月(66.7%)まで実践が広がった。これらは、学部目標として、先生方が意識してくださったことや、夏休みに、具体的な授業づくりのあり方について研修を重ねたことが成果につながったと思われる。③回答が可能な生徒には、ICTの活用で学ぶことが楽しくなったかどうか聞いた。参加コース生徒(20回答/24名)では、70%の生徒が「生活コース生徒(5回答/16名)では、100%の生徒が楽しくなった」と回答した。生徒の意見として、キーボードでプレゼンがしやすくなった。Googleで調べやすい、アプリを使った学習が楽しい。などICT活用の良さがあった一方で、操作の仕方がわからない、機器に興味がない、自分の推しが眺められる、YouTubeが観られてよいなど、生徒とICTとの関わり方から学習していく必要があることもわかった。①②80%リアが目標のため、評価はB。</p> | B | <p>○単純に、何でもかんでも、ICTを活用することがよいのではなく、一人一人のニーズに合うアプリの選定や活用方法の模索や、指導者が授業づくりの中で、ICTの活用を通して何を学習していくか目的をはっきりしておくことなど、生徒にとって有益となる活用の仕方が求められると感じている。 ○また、今後の社会で生き抜いていくためのICT活用との向き合い方や、情報モラルについて学習を積み重ねることが必要と考えている。 ○10月末現在、来年度に向けて、ICT活用の学習を盛り込んだ教育課程編成、各教科の学習内容について検討している。</p> | |

| | | 年 度 当 初 | | | 評 価 結 果 (10月) | | |
|--------------|----------|-------------------------------------|---|---|---|---|--|
| 評価項目 | 部評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 次年度への改善方策 | |
| 質の高い教職員集団の実現 | 研究部 | ○児童生徒の表現力を育成するための指導者の授業力向上 | ○令和4年度は2回の研究の日を通して全学部の複数の授業公開を実施することができた。他学部の普段の実践を知り、学び合うことのできる良い機会となった。本校オリジナルの授業研究の方式を来年度も継続しながら、令和5年度からは表現力の向上をテーマに新しい研究に取り組んでいく。 | ○学部ごとや全体の授業を公開することを通して、表現力向上をめざした授業の工夫を知ることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答 | ○授業者が実施(アセスメントの結果等)・目標・授業の工夫がわかるシートを準備する。 ○授業者と参観者が授業について建設的に話し合うことができた「授業公開」となるような場を設定する。 | ○9月に行った研究の日の授業力向上研修では、3つの分野の講師を招き、演習に重きを置いた学ぶ機会を設定した。アンケートの結果、3つのうちの2つを選択して参加できたことや、「実際の児童生徒の立場となり参加したことがよかった」、「指導支援の意図等を知ることができた」という回答をはじめ、9割以上「よかった」という回答を得られたが、体力的にきつかった等の意見もあった。また、参加者は意欲的に笑顔で参加している様子が多く見られた。 ○授業公開については、現在学部での公開を実施しているところである。 | B ○今年度の研修をふまえ、来年度も演習型研修を実施するかどうか検討中である。 ○授業公開については、11月の研究日と、12月の全体研の日を使って他学部の授業実践を見る機会を設けている。 ○今回の授業公開のやり方が良かった場合は、来年度も同じやり方で継続して研修や授業公開を行いたい。また、改善点も見極め、来年度にいかしたい。 |
| | 教務部 | ○授業に活かせる年間指導計画の整備 | ○年間指導計画の見直しを毎年行う中で、各活動のつながりを意識した立案がされている半面で、学級経営簿の簡素化で各教科等の活動計画の横のつながりの把握が難しくなった実態がある。 ○合わせた指導における年間指導計画が揃っていない実態がある。 | ○各教科等の年間指導計画の書式について整備を完了させることができる。(すべての計画を作成) ○各教科等の年間指導計画をまとめられる書式を作成し、各教科等のそれぞれの年間指導計画を横断的に確認できるものを作成する。 | ○学部の系統性を確認しつつ、すべての教科、合わせた指導等の年間指導計画の作成を進める。 ○各教科等の年間指導計画を作成作業で全体をまとめられるように書式等の工夫を行う。 | ○年間指導計画の見直しを進める中で、個別の教育支援計画や指導計画、本校で活用を進めている学習単元の評価シートの様式も関連して見直しが必要ながわかってきた。 ○年次ごとに進めていく予定を組み、各文書の書式の変更に対して優先順位をつけながら進めていく必要がある。学校における文書作成全体を見据えながら検討を進めている。 | C ○県が進めている県内特別支援学校における文書作成様式の統一のスケジュールと、本校の実態とを考慮しながら優先順位をつけたり、関係の部署との連携を図りながら整理し、移行を進めていく。 |
| | 全体 | ○時間外業務の原因把握と業務カイゼンの推進 | ○個々の業務を見直し、継続的に業務量の平準化を図る必要がある。 ○前年度比で月45時間を超えて時間外勤務をする者が増えている実態がある。 | ○日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、研修等で自ら業務カイゼンに参画し、具体的な改善策に向けて取り組む。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答 | ○会議をしない日やノー残業デいの設定し、早期退勤への意識を高めるとともに計画的に勤務をする環境を整え、勤務簿の自己管理の徹底を図る。 ○業務カイゼンに関する研修会を実施し、一人ひとりが業務カイゼンに向けての意欲を高めるとともに自ら考えた改善策を取り組みにいかす。 | ○教職員の89.8%が日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、研修等で自ら業務カイゼンに参画し、具体的な改善策に向けて取り組んでいると回答した。 ○夏季休業中に業務カイゼンに関する研修会を実施し、一人ひとりが業務カイゼンに向けて自ら考えた改善策を提案し、意欲を高めることができた。 | B ○業務カイゼンに関する研修会で一人ひとりが業務カイゼンに向けて自ら考えた改善策を具体化するための取り組みを各担当者を中心に進めている。 |
| | 事務部 | ○事務の効率化と「チーム事務室」の推進 | ○新たに担当する業務の引継ぎや業務進捗管理に一部十分でなかったところがあった。 | ○各自の業務が誰が見てもわかりやすく整理されている。 | ○各自が担当業務の効率化と見える化を行う。 | ○各自で担当業務の効率化と見える化を進めているところであるが、目標とする「各自の業務が誰が見てもわかりやすく整理されている」状態には至っていない。 | C ○DBを利用し、担当者以外でも業務の処理方法や進行管理ができるよう整理する。 |
| 安全で安心な学校の実現 | 健康教育部 | ○状況に応じた感染症対策の実施 ○保健指導の充実に向けた環境整備 | ○本校はヘルメクス施設としての対応が必要であり、新型コロナウイルス感染症の第5類移行後も、その時々状況に応じた感染症対策が求められる。 ○保健指導における教材づくりが進んでいる半面、データの保存先が曖昧で活用がしづらかったり、指導要領等から必要な情報を探すのに時間を要したりする。 | ○校内における感染症対策のマニュアルを作成し、対応を実施する。 ○保健指導用のデータ教材や授業づくりに必要な情報が活用・共有しやすいように、環境整備を行う。 | ○学校保健安全法施行規則等の法的根拠に基づきマニュアルを作成するとともに、教職員に周知し、対応を進める。 ○校内のデータの保存先を明確にするとともに、授業づくりに必要な文書や情報リンクを添付した一覧シートを作成し、活用の呼びかけを行う。 | ○文科省「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル」等の法的根拠をもとに、校内の対策マニュアルを作成し対応した。新型コロナウイルス感染症の第5類移行後は、対応の項目ごとに継続する点と変更する点について教職員間で共有し、日々の学習活動や行事等において一貫した対応を実施することができた。 ○教職員アンケートでは、約6割が「だいたいそう思う」と回答した。保健教材の保存先については指定し周知している。また関連文書や情報リンクを添付したファイル等は作成途中であるが、学校が使用しているインターネットクラウドに保存ができています。 | B ○今後も、学校医等の助言を受けながら適宜マニュアルの見直しを行っていくとともに、対策の具体について学校保健委員会等で周知していきたい。 ○より一層周知できるように、学習部と連携しながら呼びかけを行っていく。 |
| | 安全・環境部 | ○安全・安心への意識と体制作り | ○各種訓練、研修会、ヒヤリハット等を通して、教職員の安全で安心な環境づくりに対する意識を高めるよう努めている。 ○地震、火事、不審者などの避難訓練の方法や緊急時に使用する機器の扱い等に課題が上っている。 | ○児童生徒が安全・安心な環境で学習できるよう避難訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有、課題への対応を適切に行っている。 | ○安全点検を適切に行い、事務部への報告を行う。 ○安全・安心への意識を高める体制作りを行うことができるように、避難訓練の方法などを検討・見直しをしながら計画、実施する。 | ○ヒヤリハット事例を元に、危険が予想される点等を重点的に意識してもらいながら、全職員で点検を行い、毎月事務部へ報告した。職員へのアンケートからも、安全・安心な学校環境への意識の高さが伺われる。 ○避難訓練方法の見直しを行った。火事対応避難訓練では、火元に近い教室児童生徒は、より迅速に逃げる手順で計画し実施した。地震対応避難訓練では、中部地震時の現状を元に停電状態を想定し、計画実施した。 | B ○全職員で、危険を予測する視点を持ちながら安全点検を行い、ヒヤリハットで情報を共有し、それらのことを継続する。 ○児童生徒の実態や校舎の現状を元に、その都度、最善の方法を検討しながら避難訓練を計画し、実施する。 |
| | 安全・環境部 | ○より安全・安心な教育環境 | ○定期的な掃除道具点検、職員作業により、校舎内外の校内外の環境が整った。 ○TEAS報告やエコ点検を定期的に行っているが、エコについての取り組みがクラスによって差がある。特に、水道、紙の使用量が増えている。点検内容を見直した上で、結果を見て呼びかけを行っている。 | ○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まる。 ※職員作業の実施(年2回) ※掃除道具点検の実施(年2回) ※水道・電気の使用量で、昨年度との比較を周知する。 ※エコ点検で◎の割合が6割以上 | ○年に2回の職員作業を計画実施し、安全安心で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に関してエコにつながる具体的な取り組みを示すとともに、掲示板にTEAS報告を載せ、全校への意識づけを行ったり、職員への協力を呼びかけたりする。 | ○夏の職員作業では猛暑の影響で、必要最低限の箇所のみの実施となった。 ○エコ委員会、飼育委員会、給食担当とスムーズに連携できている。野菜くずを捨てずに飼育委員会で利用したり、エコ点検、エコボックスを利用したりするなど、TEASが定着している。 ○エコにつながる環境緑化の活動をホームページにあげることができた。 ○電気、水道、ごみの量は大規模工事の関係で昨年度との比較がむずかしい。 | B ○冬の職員作業で、夏にできなかった箇所も入れる。 ○各学部や部門で日々取り組んでいるエコ活動をホームページでとりあげ、TEASの意識づけを行う。 ○エコ点検は実施しているが、△が多かった項目については、期間を設け、呼びかける。 ○電気、水道、ごみの量について、今年度の状況を定期的に全体に知らせ、意識づけを行う。 |

| 年 度 当 初 | | 現 状 | 目 標 (年度末の目指す姿) | 目 標 達 成 の た め の 方 策 | | | | |
|----------------------|---------|--|---|---|--|---|---|--|
| 「チームく らよう」の 推進 | 情報教育部 | <ul style="list-style-type: none"> ○本校教育についての理解啓蒙につながり、指導支援の連携を密にしていくための教育活動の発信 ○児童生徒の端末の活用促進 ○ICTを活用した効率的な業務改善 | <ul style="list-style-type: none"> ○定期的に学校ホームページで教育活動について発信しより分かりやすいものとなってきた。 ○指導者用端末の整備の遅れ等のため児童生徒の1人1台端末による学習活動が十分に実施できていない。 ○グループワークスペースの活用によりペーパーレス化が徐々に進んできた。 | <ul style="list-style-type: none"> ○教育活動や学校教育の情報掲載等、学校ホームページの充実を図る。 ○単一学級児童生徒の1人1台端末を活用した授業が実施できるよう支援する。 ○教職員のICT研修の他、各分掌や学部、研究部等と連携し、学校全体としてあらゆる機会にICT活用を導入し、効率的な業務ができるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○定期的に情報掲載できるよう各部門、学部での当番制にし、週1回以上の更新をする。 ○教材作成や情報モラルの教職員研修の実施や個別のフォローアップやとともに1人1台端末の利用場面の日常化に取り組む。 ○各分掌業務の中でアンケートなどグループフォームで行ったり、ドライブやミーティングを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ○教職員の96.6%が学校ホームページの充実に取り組んでいると回答した。 ○教職員の84.7%が単一学級児童生徒の1人1台端末を活用した授業に取り組んでいると回答した。 ○教職員の84.7%がICT活用を導入して、効率的な業務に取り組んでいると回答した。 | A | <ul style="list-style-type: none"> ○教職員が学校ホームページでの情報発信の意義を理解し、定期的によりわかりやすい記事アップができるよう組織的に取り組みを進める。 ○児童生徒の1人1台端末を日常的で継続的な活用により教育的効果を得られるよう指導者の研修や授業支援等を通してフォローアップしていく。 ○また業務の効率化の中途であると認識している。まずは会議の削減につながるクラウドの活用をスタートし学校全体でDXを一歩ずつ進める。 |
| | 支援部(校内) | <ul style="list-style-type: none"> ○関係機関との連携を含めた校内体制の明確化と、それに伴った連携強化の実施 | <ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の実態の多種多様化、社会や家庭環境の変化等により、各関係機関との連携の仕方も多様化しており、よりスムーズに連携できるよう工夫をしていく必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒に関する各事案について、全職員が校内体制に沿って、関係機関とも役割分担しながら迅速に対応する。 ○各事案に関する校内体制について、新たに作成したり追加修正等を行ったりする。 ○定期的に関係機関と情報共有や共通理解を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ○年間を通じて、支援会議等を活用するとともに、関係機関への訪問も積極的に行う。 ○校内体制について年度初めに全職員に周知徹底するとともに、具体的な事例も挙げながらわかりやすく伝える。 ○職員会等で全職員に周知徹底するとともに、校内支援委員会を中心に対応についての検証を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ○年度初めの職員会で、基本的な知識や対応について具体例を挙げながら職員間で共通理解をした上で、校内での体制、対応について確認を行った。様々な事案について、校内支援担当を中心とし、各学部や外部機関と連携しながら進めていくことができていく。 ○コロナが落ち着き始めたため、年度初めに関係機関への訪問を行った。また必要に応じて支援会議も実施していくことで、情報共有や共通理解の充実を図った。今後は、各機関の役割分担をより明確にしながら支援を行っていく必要がある。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○支援会議等を実施する際には、レジメに「役割分担」の項目を明記し、必ず確認を行うようにする。 |
| | 支援部(地域) | <ul style="list-style-type: none"> ○地域校や関係機関のニーズの把握 | <ul style="list-style-type: none"> ○センターの機能の活用について利用者側の成果や課題を知る機会が少なく、今後の体制に活用することが難しいケースがあった。 | <ul style="list-style-type: none"> ○各種会議や体験等を活用し、地域校や関係機関からのニーズを把握する。 ○センターの機能活用の成果と課題、ニーズについて、電話、聞き取り、アンケートを実施してまとめる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○体験入学・体験学習、通級指導教室等の場面で、関係者にアプローチをする。 ○アンケートは文書に加え、Googleフォームによる回答ができるよう準備する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○通級指導教室では、連絡帳に加えてclassroomも活用し、学校での様子や指導・支援の経過について情報共有を行うようにした。それにより、その場だけの話し合いではなく、継続した指導・支援につながってきている。 ○学校説明会や研修会で参加者に対してアンケートを実施した。それにより多くの意見を集約できるようになり、アンケートの内容を元にした具体的な要望の聞き取りも少しずつ増えてきている。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○今後も各種会議や体験等を活用し、引き続きアンケートを実施したり、関係機関等からの具体的な聞き取りを続けていけるよう努める。 |
| | キャリア教育部 | <ul style="list-style-type: none"> ○保護者への情報発信 | <ul style="list-style-type: none"> ○保護者対象視察研修等を工夫しながら実施する方向で進めている。人権教育・交流や進路に関する保護者への情報提供の充実を図る必要がある。 ○キャリア教育参観日(11月)に向けた保護者への周知が必要。 | <ul style="list-style-type: none"> ○保護者アンケートで8割以上が「進路や人権教育・交流に関する情報発信ができています」と回答する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○定期的なキャリア教育だより(PTA人権教育研修会・公開学習・交流関係)・進路に関する学習等の内容掲載)の発行(年6回以上) ○卒後に向けた事業所情報提供(中部地区福祉セミナー動画提供) ○小・中・高等部それぞれの段階に応じた進路に関する取組の説明(学部懇談・学年懇談等) | <ul style="list-style-type: none"> ○キャリア教育だよりは3号発行済み。今後、PTA人権研修会、交流関係、実習関係の内容で随時発行予定。 ○卒後に向けて、中部福祉セミナーで30カ所程度の事業所情報を提供した。 ○進路に関する取組の説明を、学部ごとに機会を捉えて実施中。 ○キャリア教育参観日の実施に向け、キャリア教育についての保護者説明を計画・準備中。 ○PTA視察研修を3年ぶりに実施。約20名の保護者の参加があった。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○状況にはよるが、中部地区福祉セミナーを参集形式で行う予定。 ○PTA視察研修等を充実させていきたい。 |